

# 神奈川県下における近世井戸址の研究（3）

近世研究プロジェクトチーム

## 1. はじめに

近世井戸址119基を集成・形態分類（1997年度）・年代観（1998年度）について分析検討してきた。その結果、形態分類では、円筒状を呈するⅠ群が主体で、深さが2 mを超え（Ⅰ類）上部に変形部分のない（ア属）素掘り（A種）のⅠ群Ⅰ類ア属A種が最も多い。Ⅰ群に次いでⅢa群、Ⅳ群、Ⅲc群のロート状や逆截頭円錐状が多く、形態分類した116基中この4群で101基87%を占めていて、円筒形状の素掘りの井戸が主体であったことが判明した。また、深さ2 m以上の72基中38基がⅠ群で50%を超えていた。

年代は、集成した119基中51基の43%で過半数に及ばず、傾向を言及するにとどまったが、17世紀代はロート状や逆截頭円錐状のⅢa群、Ⅲc群、Ⅳ群が主体で、18世紀代は17世紀代に少なかったⅠ群が数を増してくるのに対し、17世紀に主体であったⅢa群、Ⅲc群、Ⅳ群は減少してくる。19世紀代はⅠ群が圧倒的になりⅢ群は見られなくなる。18世紀（江戸時代後期）にロート状を呈するⅢ群からほぼ垂直に深掘するⅠ群に変わっていく流れが見られる。今回は立地や平面的分布による変化を見て、その課題を明らかにしていくことを試みた。



第1図 近世井戸址の分布

## 2. 形態別分布の検討

119基の分布を形態別に示したのが第1図である。約6割が水位が高く、比較的井戸の掘り易いと思われる逗子市・平塚市・鎌倉市等の沖積地や砂丘に、約4割が横浜市・綾瀬市・相模原市等の台地や丘陵に分布しており、今のところ山間に立地する遺跡からの検出例は認められない。ここでは井戸址の形態と立地にどのような関係があるのかを検討してみたい。

【Ⅰ群】 52基が10市19遺跡（群）に分布する。県内の近世井戸址の代表的な形態といえ、綾瀬市・平塚市・横浜市・川崎市・相模原市の丘陵や台地に立地する遺跡から逗子市・鎌倉市・小田原市・藤沢市・平塚市の沖積地や砂丘に立地する遺跡まで広い範囲で認められる。

【Ⅱ群】 2市2遺跡に2基が分布するのみの希少形態である。藤沢市・湘南藤沢キャンパス内遺跡（184）と平塚市・豊田本郷遺跡（212）で見られる。立地は前者が丘陵、後者が沖積平野である。

【Ⅲ a 群】 19基が8市9遺跡（群）に分布する。Ⅰ群に次いで数の多い形態である。市別にみると、逗子市に5基、平塚市に4基、相模原市に3基、川崎市および綾瀬市に2基があるほか、横浜市・鎌倉市・小田原市に各1基が分布する。内陸部・低地の別なく県内のほぼ全域で認められるが、井戸側を有するもの（6基）は、横浜市・奈良地区遺跡群受地だいやま遺跡（5）第2号井戸址を除いて砂丘・沖積地に立地する。

【Ⅲ b 群】 7基が2市2遺跡（群）に分布する。逗子市・池子遺跡群に6基（No.7地点3基、No.1-B地点・No.1-C地点・No.5地点各1基）、藤沢市・折戸遺跡（182）に1基あり、立地はいずれも沖積地である。本群は85%が池子遺跡群に集中しており、地域限定的な形態といえそうである。

【Ⅲ c 群】 14基あるが、分布は2市2遺跡（群）に限られる。池子遺跡群で10基（No.7地点5基、No.5地点3基、No.1-C地点2基）、豊田本郷遺跡で4基が検出されている。本群はⅢ b 群と同様に地域性がみられる形態といえ、立地も沖積地に限られる可能性が高い。

【Ⅳ群】 16基が4市5遺跡（群）に分布する。池子遺跡群の6地点で9基、豊田本郷遺跡で4基みられるほか、鎌倉市・材木座町屋遺跡（398）、折戸遺跡、原口遺跡から各1基が検出されている。立地は丘陵斜面の平塚市・原口遺跡以外はすべて沖積地である。

【Ⅴ群】 4基が2市2遺跡（群）に分布する。池子遺跡群No.7地点に3基、鎌倉市・若宮大路周辺遺跡群No.242（397）に1基ある。本群は今のところ、逗子市・鎌倉市の沖積地といったきわめて狭い地域でしか確認されていない。Ⅲ b 群・Ⅲ c 群と同様に地域限定的な形態といえるようである。

【Ⅵ群】 2基が2市2遺跡（群）に分布する。Ⅱ群と同じく希少形態である。奈良地区遺跡群受地だいやま遺跡と平塚市・新町遺跡（218）に認められる。立地は前者が丘陵、後者が沖積平野である。

【Ⅶ群】 3基が2市2遺跡に分布する。横浜市・西ノ谷遺跡（34）に2基、原口遺跡に1基ある。いずれも台地または丘陵に立地する屋敷周辺の段切り部分に構築されている。

## 3. 年代別分布の検討

51基の使用年代（集成No.10・23・31・70・118以外は推定使用年代）は、16世紀後半8基、17世紀前半12基、17世紀後半6基、18世紀前半5基、18世紀後半14基、19世紀前半6基である（第2～5図）。ここでは、それらを16世紀後半・17世紀代・18世紀代・19世紀前半の4期に分け、各時期の傾向をみることにする。

【16世紀後半】 8基の立面形態は、Ⅲ a 群3基、Ⅰ群・Ⅲ b 群・Ⅲ c 群・Ⅳ群・Ⅵ群各1基で、Ⅲ群が62.5%を占める。深さは5基が2m以上、3基が2m未満で、深さの知れる7基の平均は2.8mを測る。上部の

近世井戸址年代別集成一覧

16世紀代

集成No.	遺跡No.	遺 跡 名	遺 構	使用年代	形態分類	深さ(m)	立 地
81	342	綾瀬市・宮久保遺跡	SE02	16世紀後半	I 群1類イ属A種a	3.38	丘陵斜面
31	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C 地点	K-13号井戸址	16世紀後半	Ⅲa群2類ア属A種b	1.7	低地
67	155	鎌倉市・政所跡	北区1面井戸1	16世紀後半	Ⅲa群1類ア属B-①種		沖積低地
92	257	小田原市・中宿第Ⅱ地点	第1号井戸	16世紀後半	Ⅲa群1類イ属B-③種	7.01	扇状地
43	122	逗子市・池子遺跡群No.5地点	K-21号井戸址	16世紀後半	Ⅲb群2類ア属A種b	1.9	低地
51	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第22号井戸址	16世紀後半	Ⅲc群1類ア属A種b	2.3	低地
25	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C 地点	K-6号井戸址	16世紀後半	Ⅳ群1類ア属A種b	2.3	低地
97	218	平塚市・新町遺跡	1号井戸址	16世紀後半	Ⅵ群2類イ属A種b	0.96	沖積平野

17世紀代

集成No.	遺跡No.	遺 跡 名	遺 構	使用年代	形態分類	深さ(m)	立 地
33	118	逗子市・池子遺跡群No.1-D 地点	第5号井戸址	17世紀前半	I 群1類ア属A種b	3.3	低地
28	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C 地点	K-10号井戸址	17世紀前半	Ⅲa群2類ア属A種b	1.5	低地
35	118	逗子市・池子遺跡群No.1-D 地点	第8号井戸址	17世紀前半	Ⅲa群1類ア属A種b	4.2	低地
60	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第38号井戸址	17世紀前半	Ⅲa群1類ア属A種b		低地
95	202	平塚市・中原御殿D遺跡	SE01	17世紀前半	Ⅲa群1類ア属B-②種	3.92	砂丘斜面
23	116	逗子市・池子遺跡群No.1-B 地点	第1号井戸址	17世紀前半	Ⅲb群2類ア属A種b	1.6	低地
30	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C 地点	K-12号井戸址	17世紀前半	Ⅲc群1類ア属A種b	2.1	低地
41	122	逗子市・池子遺跡群No.5地点	K-11号井戸址	17世紀前半	Ⅲc群1類ア属A種b	3	低地
50	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第21号井戸址	17世紀前半	Ⅲc群1類イ属A種b	2.7	低地
54	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第31号井戸址	17世紀前半	Ⅲc群1類ア属A種b	2.3	低地
32	118	逗子市・池子遺跡群No.1-D 地点	第2号井戸址	17世紀前半	Ⅳ群1類ア属B-③種a	4.1	低地
70	397	鎌倉市・若宮大路周辺遺跡群(Na.242)	井戸11	17世紀前半	V 群1類ア属B-①種	2.2	砂丘
12	34	横浜市・西ノ谷遺跡	オミネ屋敷地区井戸 5	17世紀後半	I 群1類ア属A種a	4	台地
16	395	横浜市・市ノ沢団地遺跡	第1号井戸	17世紀後半	I 群1類イ属A種b	5.5	台地
118	222	平塚市・原口遺跡	K-9号井戸	17世紀後半	I 群1類ア属A種b	4.9	丘陵
26	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C 地点	K-7号井戸址	17世紀後半	Ⅲb群2類ア属A種b	1.5	低地
29	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C 地点	K-11号井戸址	17世紀後半	Ⅲc群1類ア属A種b	3.6	低地
106	212	平塚市・豊田本郷遺跡	SE77	17世紀後半	Ⅲc群2類ア属A種b	1.92	沖積平野

18世紀代

集成No.	遺跡No.	遺 跡 名	遺 構	使用年代	形態分類	深さ(m)	立 地
3	4	横浜市・奈良地区遺跡群熊ヶ谷遺跡	第3号井戸	18世紀前半	I 群1類イ属A種a	4.67	丘陵
68	155	鎌倉市・政所跡	北区1面井戸2	18世紀前半	I 群2類ア属A種b	1.9	沖積低地
91	342	綾瀬市・宮久保遺跡	SE21	18世紀前半	I 群1類イ属A種b	3.42	丘陵斜面
63	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第44号井戸址	18世紀前半	Ⅲc群1類イ属A種b	4.2	低地
101	212	平塚市・豊田本郷遺跡	SE43	18世紀前半	Ⅲc群1類ア属B-②種	1.9	沖積平野
6	11	横浜市・長光庵寺址	井戸（I-1）	18世紀後半	I 群1類イ属A種b	5.8	台地
7	34	横浜市・西ノ谷遺跡	西ノ上地区井戸 1	18世紀後半	I 群1類ア属A種a	5	台地
9	34	横浜市・西ノ谷遺跡	オミネ屋敷地区井戸 2	18世紀後半	I 群1類ア属A種a	7.5	台地
10	34	横浜市・西ノ谷遺跡	オミネ屋敷地区井戸 3	18世紀後半	I 群1類イ属A種a	7	台地
17	395	横浜市・市ノ沢団地遺跡	第2号井戸	18世紀後半	I 群1類ア属A種b	5.7	台地
59	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第37号井戸址	18世紀後半	I 群1類ア属A種b	3.5	低地
69	162	鎌倉市・円覚寺境内西やぐら群	第1号やぐら内近世井戸	18世紀後半	I 群1類イ属A種a		谷戸開口部
89	342	綾瀬市・宮久保遺跡	SE19	18世紀後半	I 群1類ア属A種b		丘陵斜面
113	222	平塚市・原口遺跡	K-4号井戸	18世紀後半	I 群1類ア属A種b	1.8	丘陵
18	56	川崎市・宮添遺跡	1号井戸址	18世紀後半	Ⅲa群1類ア属A種a	7.23	丘陵
27	117	逗子市・池子遺跡群No.1-C 地点	K-8号井戸址	18世紀後半	Ⅲa群2類ア属A種b	1.05	低地
46	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第5号井戸址	18世紀後半	Ⅲb群1類イ属B-④種b	3.8	低地
61	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第41号井戸址	18世紀後半	Ⅲb群1類ア属A種b	3.1	低地
56	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第34号井戸址	18世紀後半	V 群2類ア属A種b	1.4	低地

19世紀代

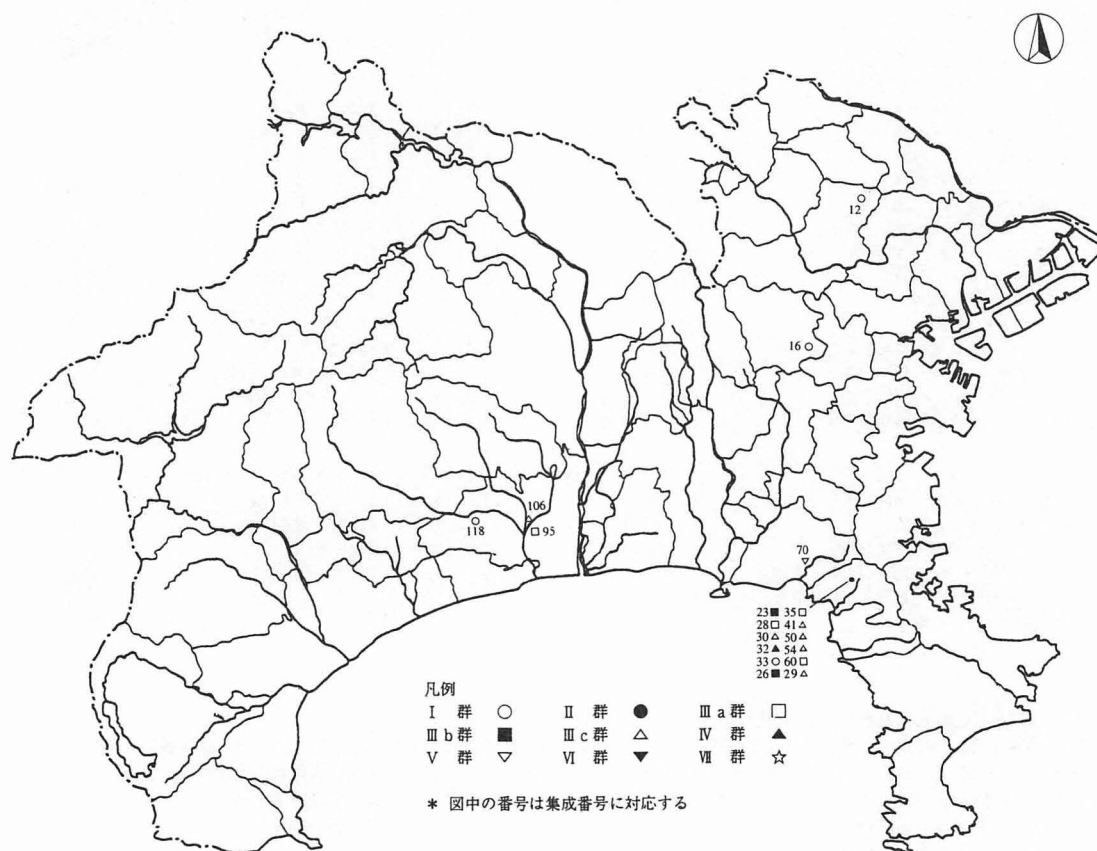
集成No.	遺跡No.	遺 跡 名	遺 構	使用年代	形態分類	深さ(m)	立 地
2	4	横浜市・奈良地区遺跡群熊ヶ谷遺跡	第2号井戸	19世紀前半	I 群1類ア属A種a	4	丘陵
8	34	横浜市・西ノ谷遺跡	オミネ屋敷地区井戸 1	19世紀前半	I 群1類イ属A種b	6.3	台地
47	124	逗子市・池子遺跡群No.7地点	第7号井戸址	19世紀前半	I 群2類イ属A種b	0.7	低地
94	400	小田原市・三の丸御長屋跡第1地点	1号井戸	19世紀前半	I 群1類イ属A種b		低地
4	5	横浜市・奈良地区遺跡群受地だいやま遺跡	第1号井戸址	19世紀前半	Ⅵ群1類ア属A種a	3.5	丘陵
15	34	横浜市・西ノ谷遺跡	オミネ屋敷地区横井戸 2	19世紀前半	Ⅶ群		台地

註

1. 図・表中の集成No.は、かながわの考古学 研究紀要 3（1998）と同じ。
2. 図・表中の遺跡No.は、かながわの考古学第5集（1995）と同じ。なお、同第5集掲載以後に刊行された報告書の遺跡番号は次の通り。  
395 横浜市・市ノ沢団地遺跡    396 川崎市・黒川地区遺跡群No.10遺跡    397 鎌倉市・若宮大路周辺遺跡群（No.242）  
398 鎌倉市・材木座町屋遺跡    399 小田原市・瀧之前遺跡    400 小田原市・三の丸御長屋跡第1地点
3. 使用年代・形態分類・深さの詳細については、かながわの考古学 研究紀要 3（1998）・4（1999）を参照。
4. 立地については、各報告書の記載に準じた。



第2図 推定使用年代が16世紀後半の井戸址の分布



第3図 推定使用年代が17世紀代の井戸址の分布



第4図 推定使用年代が18世紀代の井戸址の分布



第5図 推定使用年代が19世紀前半の井戸址の分布

変形部分の有無は、掘込みをもたないものが5基あり、そのうちの4基は池子遺跡群に存在する。井戸側の有無については、Ⅲ a 群のNo.67とNo.92の2基が有している。足掛かりは丘陵に立地するNo.81のみに認められる。立地場所は7基が沖積地、1基が丘陵であり、沖積地の分布が目立つ。

【17世紀代】 18基の立面形態は、前半がⅢ a 群・Ⅲ c 群各4基、Ⅰ群・Ⅲ b 群・Ⅳ群・Ⅴ群各1基、後半がⅠ群3基、Ⅲ c 群2基、Ⅲ b 群1基である。前半はⅢ群の占める割合が7割を超えているが、後半になると円筒状のⅠ群がやや増えてⅢ群と同数となる。深さは14基が2 m以上で、平均は約3 mを測る。上部の変形部分の有無は掘込みをもたないものが主体で、もつものはわずか2基しかない。井戸側は前半代のNo.32・70・95の3基が有している。足掛かりはNo.12とNo.32の2基に認められるのみである。立地場所は16世紀後半と同様沖積地が主体で、特にⅢ群はいずれも沖積地に立地する遺跡から検出されている。後半になるとそれまであまり認められなかったⅠ群が丘陵や台地で見られるようになる。

【18世紀代】 19基の立面形態は、Ⅰ群12基、Ⅲ a 群・Ⅲ b 群・Ⅲ c 群各2基、Ⅴ群1基である。17世紀後半から増加し始めたⅠ群がⅢ群にかわって主流となる。深さは16基が2 m以上で、平均は約4 mを測る。上部の変形部分の有無をみると、掘込みをもたないものが12基、もつものが7基で、後者のうちの5基はⅠ群である。掘込みの形状は不整形なものが多いが、No.6のように井戸枠を設置したと思われる方形を呈するものもある。井戸側はⅢ群のNo.101およびNo.46の2基のみが有している。足掛かりはNo.3・7・9・10・69・18の6基に認められる。そのうちの5基はⅠ群で、深さの平均は約6 mを測る。立地場所は丘陵地・低地を問わないが、後半になると台地や丘陵地での検出例が多くなっている。

【19世紀前半】 6基の立面形態は、Ⅰ群が4基、Ⅵ群・Ⅶ群が各1基である。Ⅰ群が主流でⅢ群は見られなくなる。深さの知れるのは4基で、このうちの3基は3.5 mを超えている。上部の変形部は3基で認められる。構造物の有無についてみると、井戸側を伴うものはなく、足掛かりはNo.2・No.4で認められる。立地場所は丘陵地・低地を問わないが、18世紀後半と同様に台地・丘陵が主体となっている。

#### 4. まとめ

以上の状況から県内の近世井戸は、16世紀後半から17世紀前半は井戸上部の膨らむロート状を呈するⅢ群が主で、掘削深度は大半が2 m～3 mで一部地域に7 mに及ぶものが見られ、大半が低地に立地し丘陵部のものも斜面や中腹に立地していて、前時代の伝統を引き継いでいる時期といえる。17世紀後半から18世紀前半は、前時期に主体であったⅢ群と前時期に極一部に見られたⅠ群とが半々となり、掘削深度も平均で3.5 m前後と深くなって、Ⅰ群は丘陵地、Ⅲ群は低地に立地し、前時期に加え新たな技術が一般にも導入されてきた時期と思われる。18世紀後半から19世紀前半は、前時期に数を増してきたⅠ群が主体となって丘陵地にも多く造られるようになり、掘削深度も更に深くなる。前時期に一般に導入された技術が定着してきた時期と言え、19世紀に入るとⅢ群は見られなくなる。

3回の分析により県内近世井戸の変遷が僅かに見えてきた状況で、限られた資料であり傾向があるとしておきたい。今後資料の増加を待って再検討する必要を感じて結としたい。